

和倉温泉お祭り会館

農業と漁業は、能登半島村落部の主産業であり、ここでの暮らしは、自然と天候に大きく左右されます。能登半島の各地で、豊作と大漁を祈って、毎年多くのお祭りが開かれます。

和倉温泉お祭り会館では、色鮮やかな展示と没入効果を通して、これらのお祭りをより深く学ぶことができます。お祭りに使う実物大の山車は、5月から9月に七尾で開かれる4つの大きなお祭りを表しています。大画面の映像、録音、そして体験活動により、お祭りの雰囲気と興奮を1年中味わえます。

でか山：青柏祭

青柏祭は、七尾市街地にある大地主（おとこめし）神社の春のお祭りです。このお祭りは、西暦981年に始まったと言われ、5月3～5日に行われます。このお祭りの目玉は、3台の大きな山車（「でか山」）の曳山行事です。「でか山」はそれぞれ、高さ約12メートル、重さは約20トンあります。

「でか山」の側面を飾るのは、色鮮やかな垂れ幕です。それぞれの「でか山」は、その地域ならではの主題で飾られています。「でか山」の上には、人気がある歌舞伎の演目の場面を描いた、真に迫った人形が置かれます。

燃える大松明：能登島向田の火祭り

7月の最終土曜日に、能登島の向田町にある伊夜比咩（いやひめ）神社近くで、大きな柱状の松明が燃やされ、夜空を照らします。これは、豊作と大漁を祈るために伊夜比咩神社で開かれる一連の夏祭りのクライマックスです。この松明は、長さ30メートルの松の木を、柴の束で包んだものです。松明の上には、御幣が飾られた竹の棒がついています。柱状の松明は、太い縄で上向きに立てられ、固定されます。黄昏に、背の高い灯籠の山車（奉燈）と神輿の行列が、伊夜比咩神社から、松明を燃やす近くの会場へと向かいます。

会場で、参加者は各自の松明に火をつけます。参加者は、大松明の周りで、各自の松明を灯したままにするために、リズムカルな動きで各自の松明を回します。これは、大松明の周りに積んだ柴に火をつけるよう指導者が参加者に合図するまで続きます。柴はすぐに燃え上がります。そして大松明が燃え、ついには崩れ落ちます。地元の言い伝えによれば、大松明が山に向かって倒れるとその年は豊作になり、海に向かって倒れると大漁が期待できるそうです。大松明が倒れるとすぐに、人々は竹の棒を手にとろうと競い合います。竹の棒は、それを手にした人に幸運と幸福をもたらすと言われています。

そびえ立つ奉燈：石崎奉燈祭

能登半島の夜の祭りでは、神輿が進む道を照らすために、背の高い灯籠が運ばれていきます。この灯籠は、七尾では「奉燈」と呼ばれ、他の地域では「キリコ」と呼ばれます。8月の第1土曜日、石崎という漁業の町の人々は、石崎八幡神社に集まって大漁を祈ります。

そびえ立つ6基の奉燈に伴われて、町の中を神輿が進んでいきます。6基の奉燈は、石崎の各地区を代表するものです。奉燈の正面には縁起のよい言葉が書かれており、背面には勇壮な武士や神話の登場人物が描かれています。高さ13メートル、重さ約2トンに及ぶ奉燈それぞれを、約100人で担ぎます。担ぎ手たちは、狭い道を進んで行く際に、漁の成功を祈る言葉を叫びます。町を一周した後、奉燈は仮宮の前に集まります。このお祭りは、花火が打ち上げられて最高潮に達します。

色鮮やかな旗：お熊甲祭

それぞれが高さ20メートルにもなる赤い「杵旗」が、七尾の「お熊甲祭」の象徴です。このお祭りは、久麻加夫都阿良加志比古（くまかぶとあらかしひこ）神社の大祭です。神々に豊作を感謝するため、毎年9月20日に開かれます。それぞれの赤い杵旗は、この地域の19の末社の1つを代表しています。

各末社から、杵旗の持ち手と楽隊の行列とともに、神輿が運ばれてきます。赤い杵旗は木の杵に入れられて、最後尾で運ばれていきます。それぞれの行列は、「猿田彦」の格好をした踊り手が先導します。猿田彦は、赤い顔、長い鼻の神で、他の神々を天から案内することで知られています。猿田彦は、多くの場合、神話に出てくる天狗のお面をつけたものとして描かれます。天狗は、いたずら好きな、鳥のような魔物です。踊り手たちは、即興で荒々しい動きをしつつ、神社の本殿に到着します。

参加者たちは、神社に集まった後、広場に神輿と杵旗を運びます。広場では、各集団が順番に、地面と平行になるまで自らの杵旗を傾けます。杵旗とその杵を倒さずに傾け、再び立てるには、約 40 人が必要です。一部の集団は、群衆を楽しませるために杵旗を傾けている間、その下で神輿の競争を行います。大胆な芸、踊る神々、そして生き活きた音楽が組み合わせられたこのお祭りは、観光客に人気があります。